

なんでそんな所に住んでいるんだ！

子供のころから慣れ親しんだ裏山が牙を向いた。今までに経験したことがない地震によってがけ崩れが起き、多くの住居が一瞬にして廃墟となった。被害に遭った者や自宅に帰れない者たちは地域の公民館で心を押しつぶされながら寝泊まりすることになった。

林田は南部藩の開拓の六代目になる。妻と長女が犠牲となった。この緑豊かな土地は林田にとって生活の場であり、子供や孫たちには約束された大地であるはずだった。

地震発生から一週間が過ぎ復興の機運が高まると同時に、なぜがけの下に住宅があるのかが問われ始めた。なかには死者に鞭打つかのような発言もあった。

林田の親せきが集まり、南部開拓会が開かれた。そのなかの長老が思い出したように言った。

「そういえば林田家が入植した頃、東の山と少し離れた北の山とでは木の長さが違うと言っていた。その時は気温の関係だろうくらいにしか考えていなかった」

ある者は続けた。

「南部藩がある東北の冬も厳しかった。そこで木を移植したり、丘の裾野の風下に住居を構える方法を取っ

ていたらしい」

イフツに入植後も同じ方法を導入したが、その山は違っていた。表土が軽かったのだ。太古の時をめぐり、樽前山から降り注がれた比重の軽い火山性の灰が裏山を覆い隠したのだ。その大地の営みを教えてくれる者はこの蝦夷の地にはいなかった。しかしそれは本当だったのか。

アイヌは知っている。どこに住むか、住まないか、ここは洪水になるのか――。

諸藩から蝦夷に入植が始まると先住者のアイヌとたびたび争い事が起こった。その昔は交易を通してお互いを理解していたが、和人の入植が急増すると土地や水、魚をめぐり争いが頻発した。決定的だったのは、交易をめぐる数百人の和人が殺され、その後和睦を結んだが、和人が裏切り、各地のアイヌ首長を殺したことだ。その結果、お互い信頼関係を失ってしまい、アイヌの古くからの教えは入植者に届かなくなった。お互いの疑心暗鬼が時を経て悲劇を生んだのだ。

第4話 蝦夷を望む

Vol.133



宮井 能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョシディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

南部藩の名代として蝦夷開拓と防人としてやってきた林田勘三郎と妻のつと米農家。そして、よろず屋として活躍する南部藩からの60名は最終目的地のトフマコマフ（現在の苫小牧）を目指した。

林田とつるは宿に着くと

すぐに食事をする事になった。女中から「お口に合いますか」と聞かれた。

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

黙って食べている林田の方を見てから、つるは思い切って女中に聞いてみた。

「ぶれつど、ばたーはないのですか」女中は

「ぶれつど、ですか」

と聞き直した。二人の会話は成り立たなかった。

つるは落胆した。この蝦夷の地には紅毛人の文化が行き渡っていると思っていたからだ。

つるは林田に聞いてみた。

「ぶれつどは米の粉からできていますよね。では、なぜこのトフマコマフの地には、ないのでしょいか」

林田はつるに「その米を作るために蝦夷に来たのだ」と短く答えた。

二人は知らなかったのだ。ぶれつどが小麦粉からできることを。だが、将来この地から「北海道の米」でなければ作れない「米粉」パンの一大ブームを作り出すことになるのだ。

林田はトフマコマフに着いた翌日から一行を休ませて先着組の南部藩の者と入植先に出かけることになった。

服装は股から二つに分かれた物になった。武士の格好ではまったく役に立たないことは聞いていた。出発して半日くらいは順調に進むことができたが、その後は獣道すらないスキの原野をかき分けて、将来の入

植地を目指した。

日の出から日の入りまで、まっ平らな所を歩いていた。南部では少し歩けば必ず山坂があったのに、ここはただただまっ平だ。

そのとき、彼らの上空では渡り鳥が北を目指していた。その群れを見上げて、林田は思った。

「あいつらは苦勞なくどこにでも行ける。いっそのこと鳥になって飛んでしまいたい」

道中に小さな集落があり、そこでは食事をするのができた。そして丸一日かけてイフツに到着した。

南部藩の先発組が林田に言った。「この土地が南部のものです」

確かに見渡す限り広大な土地だ。何千町歩と米を作ることができただだわすかだが先着組もいた。

「あの住居はどこかの藩の者たちですか」

「東北諸藩になります、アイヌの者もいます」

そのときはあまり考えずにいた。林田はある開拓者に立ち寄ることになった。勝手に立ち寄るには勇気が必要だった。なぜなら元は武士だった者もいるからだ。

先発組から紹介を受けたのが、南部と同じく幕府からは外様扱いだが、石高が下になる新発田藩の村上信五郎だった。挨拶は武士の作法に

做って、林田は土間で真の礼をした。

驚いた村上も居間から降りて返礼することになった。村上も同じ武士の出なのだ。そこに南部先発組が「まあ、まあ、堅い挨拶はその辺で、ここは幕府の外の蝦夷ですから」と話を割った。

林田と村上は境遇が似ていた。やはり藩からの命令により新妻と開拓にやってきた。そして蝦夷に自分の将来をかけてみたのだ。村上はイフツに来て3年が経つという。水の権利、土質、収穫、夏が短いこと、一番厄介なのは馬や牛しか使えない輸送方法であることなどいろいろ教

わった。村上は最後に口を濁した。「大酒飲みで、気性が荒いアイヌとは仲良くした方が良いが……」

林田はげんんな顔をする村上に「どうしましたか」と尋ねた。

「アイヌは文字を持たないので、彼らの言い伝えは事実なのか理解に苦しむことがある。ただ気象に関して

は卓越した予測をする」

林田は黙って聞いているしかなかった。

その晩、優に20人は寝泊まりできる離れを借りることになった。

林田は思った。それにしても立派な住居に離れだった。それなりの理由があるのだろう。村上は新発田藩

からの最初の開拓者になるので将来

を見込んで先行投資してくれたとのことだ。当然、村上はその期待に応えることになるのだが……。

翌朝は妻が待つトフマコマフに帰ることになり、二人には丁重な挨拶をしてから別れた。

蝦夷に来てひと月が過ぎた。

すぐにでも、つると南部の60名のうち30名を連れてイフツに向かいたかったが、先発組の諸藩の思惑もあり、考えたよりは手こずることに

なった。まずは実質トフマコマフを仕切る土佐藩に向かい、事務方に挨拶をした。土佐藩はトフマコマフの市街開発に興味はあったが、内陸の米栽培からはすぐ撤退した。

やつのことでイフツに向かうことになり、今度も南部先発組が同行し、丸一日かけて同じぬかるみを通り到着した。

新発田藩士・村上の妻のときは一人で家の前で忙しくしていた。軽く会釈をして声をかけた。

「どうもこの間はお世話になりました。ご主人はいらっしゃいますか」

ときはどこか暗い顔をしていた。それを察した林田は「どうされましたか」と尋ねると、ときは自分の後ろを指さしながら答えた。

「村上が裏山から降りるときに足を滑らし、けがをいたしました」

(つづく)